
龍に愛され人となる

八月一日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍に愛され人となる

【Nコード】

N7772Z

【作者名】

八月一日

【あらすじ】

これはとある女子高生たちの何気ない日常に舞い降りた？ バトル系コメディー……なのかなあ？

プロローグ 青龍編

その龍目覚めしとき
古より契りを交わさん
さすれば龍人となりて

「朝だぁ・・・」

この世の終わりみたいにな心情になりながらも、私こと緋乃芽彌夜ひのめみやは
ジリジリとけたたましく鳴り響く目覚まし時計を止める。・・・も
う一回寝ようかな。

『あ・・・じ、・・・』

「ん？」

今なんか聞こえたような・・・気のせい？
それとも耳が・・・ってまだそんな歳じゃないしありえないか。
でもアジって聞こえたような……。

「うわぁ。髪ぼっさぼっさ」

空耳の内容を気にしながら鏡を見ると、寝癖で四方八方に髪が跳
ね回ってる・・・唯一誇れるストレートが台無し。

「あり？」

さっそく化粧台の前に座ってドライヤー片手に櫛や寝癖直しでこ
の髪をどうにかしようと思った矢先のこと。いつも触ってる髪質が

何か違う。

なんか、こう・・・前は少し硬かったんだけどなんか真綿とかと比較できそうなくらいに柔らかくなってる。猫毛になったわけじゃないけど、そのくらいしんなりしてる。

思いつきでドライヤーも寝癖直しも使わずに櫛だけを通してみる。

「おぉー」

予感的中。すーっと櫛を通しただけで四方八方に跳ねていた髪がいつものストレートに。というかなんでこんな髪質になってるの？寝て起きた以外なにも思い当たることがないんだけど。

「まあ、いつか」

硬かった髪質が柔らかい それもかなり ものになったんだしマイナス面はないわけだからそんなに考えなくていいか。

「・・・・・・・・」

鏡越しに自分の髪がストレートになったのをまじまじとみていたら、なんか・・・というかなりやばいものを見た。

「蒼い・・・？」

カラコンなんて高いしおっかないからつけてない。つけた覚えもない。なのに鏡に映ってる私の眼は見間違っことなく、蒼。元の色の茶色はどこいった。

さすがの私もこれには異常を感じる。髪もそうだけど一晩前はこんなことにはなってなかったわけで・・・。

「どっしりよ」

髪は・・・まあ、どうにでもなる。問題は眼。こればかりは隠しようがない。学校に行ったらなんていわれるか・・・。

『あつこ』
「主よ・・・」

「っ！？」

主よ、って聞こえたっ！ 何、この部屋なんか居るの？ 悪霊？
というか私、憑かれた！？

「うわあ」

学校どこの話じゃ

「彌夜、いつまで寝てんの」

「あ」

髪とか眼とか悪霊とかそんなことばっか考えてる最中に入ってきたのは、母さん。

「高校生が化粧なんかしなくてもいいでしょ。どうせみようみまねでやって、悲惨な造形物になるだけなんだから」

なんかずれてるけど眼のことはなんとも言われなかった。というか化粧なんかしてない。別にくまもないからファンデでごまかさなくてもいいし。

「ほら、早く」

促されるままに身支度を整えてリビングに降りると、トーストと

コーンスープが置いてあった。
それらをまあ、マイペースに片して家を出た。

「おっはよー。ありゃ、彌夜、眼どうしたの。充血？」

家を出てしばらくしたころ、声をかけてきたのは友人の斬谷有香きりやゆか。
元気が取り柄：綺麗とかの部類にははいるんだけど、元気すぎるからそんなにもてはやされてない子。

「充血してたら赤いよ」

「じゃあ、カラコン？」

「ん、まあ」

結局、この蒼くなった眼はカラコンってことで済ませた。カラコンじゃなかったら説明のしようがないし。

「うおー髪柔らかーい」

眼をいじったかと思ったら今度は髪。しかもくしゃくしゃーって。

「どしたのー一体。髪こんな柔らかかったっけ？」

「んーまあ」

いいわけできない、というかそこまで頭が回らない。そんなに頭良くないし。こんな髪質になったの今朝だし。

「んー…ま、いつか」

「じゃあ髪くしゃくしゃすんのやめて」

ぱっと手が離れたの合図に軽く頭を左右に振る。思った通り、綺

麗に元通り。

「うはー、どうなってんのそれ」

なんかものすごい変なもの見る目なんだけど。私だって変だとは思ってるよ。

「いたっ」

「有香？ どうかした…」

「うわあ、どうなってんのこれ。ぱっくりじゃん」

なんか軽く言ってるけど有香の右腕は鋭利な刃物で切りつけたみたいに切れて血が出る。ぱっと見でもわかるくらいうわあじゃ済まなさそうな感じで。

「とにかく保健室っ」

「いいよ、こんなのなめときゃ」

「うわっ」

「いったーい」

「なんなのよこれっ」

あちらこちらで悲鳴とかが聞こえてくる。有香同様に切りつけられ
たらしいけど…、

「どうなってんの？」

『主よ』

「っ！」

またあの声？

「彌夜？　どうかしたの？」
「ううん、それより保健室」

聞こえた声は無視して有香を保健室に連れていくことを優先した。連れていく間に有香が止血らしい止血をしないから、ポケットにあったハンカチを傷口にあてて圧迫しながら目的地の保健室につくと、

「あらら。どうなってんのよ」

ハンカチが吸いきれなくなった血を、腕から血をだらだら流してるのに平然としている有香は人でごったがえしてる保健室をみてそんなことをぼやいた。

「ちよつと斬谷さん！？　そんなに血流してなに平然としているの、こっちきなさい」

保険の先生に呼ばれて入口にいた有香と私は先生の所に行った。眼をあちこちに向けたら有香ほどでもないけど切り傷から血を流してる子がほとんど。

有香が呼ばれて先生のところに行こうとすると、近くにいた子らが腕からポタポタ血を垂らす有香を見て道を開けた……凱旋みたい。凱旋を終えて先生のところに着た瞬間、血を吸いまくったハンカチは金属製のごみ箱に放り込まれて、止血するものがなくなって血を垂れ流しにしている有香の腕にガーゼやらを幾重に重ねて、包帯を巻きつけ終わると血はとまったのか滲んでもこなくなった。

「一応止血はしたから今から病院行きなさい。ここにいるこの中じや一番ひどいから、縫わないと、それ」

どつりで呼びつけられたわけだ。でも縫うほどの傷でよく平然と
してられたね。

「えー、血もうとまってるんでしょ」

「圧迫止血してるだけ。包帯緩めたらすぐにも出血するわよ」
「ほら、ただこねないで病院」

有香の手を引いて保健室を後にした。理由は至極簡単。

「ちゃんと病院行くんだよ？」

「わかったって。心配性だねー本当」

「ゆかー？」

「わかったわかった」

こうでもしないと病院に行かないかもしれないから。
有香を校門まで送り届けて教室に行こうとした時。

『主よ、そろそろ答えてもらわないと』
「っ!?!」

また!?! もうなんなの、一体。

『早苗からは龍人については何か?』
「……………」

早苗ってばあちゃんの名前…龍人?

『…あのクソ婆め』

く、くそ婆?

「ちちち」

「? ……あ」

なんか鳴いたと思ってあたりを見回したら空中にふわふわとイタチが一匹。毛がやわらかそう。

「ちちちち……」

カチカチと小さな両手を…カチカチ?

「ねえ、あのイタチなんで浮いてるの?」

『見えているんですか。能天気なものだとばかり』

なんか私の扱いがひどい。

「ちちち…ちー」

カチカチと打ち合わせていた両手をぱっと開くとイタチはこっちにむかってって、

「来るなーっ」

手で払おうとして振りぬいた手のラインに添ってなんか…というか風が、出た。

「ちーっ」

それがアメリカとかのハリケーンみたいに高密度の白染めの風。それがイタチに直撃。愛護団体来ないよね?

「痛そう」

実際痛いんだろうなー、浮きながら悶えてるし。

「うん、逃げよう」

襲ってこようとしてたんだし逃げるが一番。

私は悶えるイタチを背にして校舎へと。

校舎に逃げ込んでも追ってこなかったから、そのまま普通に授業を受けた。まあ、授業中は朝の件の話でもちきりで誰っ子一人授業を聞いてなかったけど。

「いやーっ」

そしてなぜか昼休みになったと同時に教室の窓をすばすばと切って入ってきたイタチから逃げてる私。というかなんで昼休みに来るわけ？ いやがらせ？

『あの時に始末しておかなかったからです』

こうして逃げてる間にもイタチは鎌鼬あたりをすばすば。

「きゃーっ!?!」

「見てんじゃねえぞ豚やろうがっ」

女子の制服の胸元付近が切れて、その現場に居合わせた不幸な男子生徒が切られた子の友達(女)に罵声と暴力 上記の暴言のあと、フルスイングで振りぬかれた脚が、こう……ね？ を浴びせられたり、

「フオオオオオオッフオオオオオオッ！」

現国の先生（髪が命）の髪がぱつぱつと切られて発狂してたり、

「きゃー変態っ」

「くんじゃねえよ犯罪者っ」

見回りをしていた教頭の服がすばすば切られて、威厳とかいろいろなものを無くしたりしてる光景を見ながら逃げてきた屋上。

「あ」

「ちちち」

『思慮が足りませんね。そもそもなんで屋上なんですか』

「うるさいな…」

予測したのかはともかく屋上で待ち伏せされた。

『まがりなりにも力の片鱗を扱った以上、鎌鼬はここで始末です』

「力って何」

『いいでしょう、あのクソ婆は死刑です。∴力というものは』

「うわっ」

説明聞いている最中なのにイタチは遠慮無用とばかりに鎌鼬。

話してる最中でしょうが。

「ちっ」

鳴き声なんだろうけど舌うちに聞こえる。よけなきゃ死ぬじゃない。

あちこちから血を流したイタチが恨みがましそうにこつちを睨んでる。あ、爪欠けてる。

『いい加減慣れたでしょう。次で確実に仕留めなさい』

イタチがカチカチと爪を……、

「……………」

鳴らせなかった。だって欠けてるもん。

「鳴ってないね」

『欠けているからでしょう』

「ちーーーーーッ」

あ、怒った。

「……逃げようかなー」

『仮にここから飛び降りたとしても、風を十分に使えない以上は、即死ですね』

「いやだなー……どうしよ」

『来ますよ』

「へ?」

イタチは風切り音をまきちらしながら私めがけて一直線。かけててもスパスパ切れるのね。

『手を前に出しなさい』

「へ？」

『さっさとしなさいっ』

「はいっ」

怒られながらも利き手の右手を前に出す。

『型はこのさいどうでもいいです。弓を引く型をとりなさい』

怒られる前に弓道部の構えを思い出しながら、なんとかできた。

すると手には何かを掴んでる感触。もうちょいはつきりさせたいなーとか思ってたなら、孔雀色の風が弓型になってはつきりと見えた。

『あのイタチを射抜きなさい』

「射抜けて矢ないよ」

『矢をイメージして射抜きなさい』

矢をイメージ……。

「ちーーーーー」

矢をイメージっていつても形知らない。

「あーもう、撃っちゃえ」

形をうまく想像できないまま撃った。つつこんでくるイタチに。

「あ」

「ぢぢっ」

弓は孔雀色なのに飛んで行った矢……というよりは衝撃波っぽいけ

ど、蒼白い風切り音がイタチに鼻先にあたって、全身を包んだ。

「あたたね」

『これで始末できたでしょう』

蒼白い風がバチバチと痛そうな音を立ててイタチを痛めつけてるのを聞きながら、有香大丈夫かなーとか思ってた。というかちゃんと病院行ったのかな。行かないで遊んでたりしないかな。

「いないね」

風がやんでもそこにイタチはいなかった。

『始末出来たんでしょう』

んーと、じゃあ。

「教室戻ろつと」

なにはともあれイタチはいなくなっただし、教室に戻ろつ。と
どうか私まだ昼食べてない。間に合う？

『今回の件を通してよくわかりました。あのクソ婆は死刑ですね。
龍人でありながらそれを継承するのは言語道断です』

なんかうちのばあちゃんが死刑にされるらしいけど、しぶとそう
だしそう簡単には死なないと思う。

（??）

「有香？」

『彌夜？ 学校どうなった？ 倒壊？』

「倒壊なんかしてないよ」

『ちえ、つまらないのー。あー、それとき、10針くらい縫ったんだよねー』

「そんな陽気にいうものじゃないよ、それ」

『まあまあいいじゃないの』

ケラケラと軽快に笑う有香の声。いつもこんなだもんね。

『そんじゃ、家帰ってゴロゴロするかな』

切れた携帯をポケットにしまって、屋上をあとにする。

あちらこちらでわーきゃー聞こえるけど……気にしない気にしない。きつと教頭とか教頭とか教頭が原因だろうけど、気にしない。

「ふああ……、寝ようかな」

『させるとでも？』

なんか寝させてくれないらしいけど、無視。眠いんだもん。だから寝る。

今日起きたことはとりあえず、放置……じゃなかった保留にして、空いた時間にでも考えよう。

今はこの眠気にあらがうのも無理っぽいから。でも昼どうしよう……午後の授業を睡眠時間にあてようか？

屋上から教室に戻ると、教頭の話題でもちきりになってたけど私はそしらぬ存ぜんで昼をもくもくと食べた。食べている間も青龍がぐちぐちをなんか言ってきたけど、全部無視。

『彌夜、あれほどいいましたよね。なのにあなたはぐーすか寝るとは、どういうことですか。いいですか、学生の本文は学業であって睡眠ではないんですよ？　なのにこんな、ゆるみきった顔で堂々と寝入るとは一体どういうことですか。ああ、龍人のこともさっぱりときて……、あのクソ婆、会うことがあれば必ず殺してあげましよう。忌々しい。継承者でありながらそれを放棄するとは』

そして午後の授業をフル活用して寝入ろうとしていたらそんなことをぐちぐちと言ってきたけどそれも無視。まあ、どうにでもなるでしょ？

おやすみ〜。

プロローグ 青龍編（後書き）

はい、リメイクです。

かなり前にあげていた英語題の物をいじって題名もいじってあげなおしたものです。あらずじ通り、女子高生たちの物語。青龍とかが出てきた時点で大方の検討がつてますかね？ あれとかがこれとかがそれとかが出てきます〜。

なにはともあれ、【龍にあいされ人となる】をお楽しみくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772z/>

龍に愛され人となる

2011年12月25日02時49分発行